

# 偽の情報を提示する構文と比喩

## — 「まるで」と「よう」 —

菊 地 礼

### 1. はじめに

比喩は命題としては偽である情報<sup>(1)</sup>を話者の実感としては真とすることにより形成される。例えば「肌は雪のようだ」という表現は命題[肌は雪]は物理的には偽の情報である。しかし、対象の人物の肌の美しさについての実感として話者の心理的には真の情報となる。このような構造は真偽未確認の命題を真と仮定する「だろう」などの推量や偽と仮定する「まい」などの打消推量といった事柄の真偽を取り扱う他の文法現象と類似している。助動詞「よう」は一般にこのような真偽未確認の命題に対する推量の確からしさを述べる形式と見られる<sup>(2)</sup>。しかし、真偽未確認の命題だけでなく偽の命題を提示することも可能である。比喩はこのような偽の命題を真として提示し得る形式によって表現される<sup>(3)</sup>。

比喩論においては、中村(1977)、山梨(1988)、鍋島(2016)、小松原・田丸(2019)によって日本語における比喩を表現する形式の多様性が明らかになっている。代表的な形式である「よう」「みたい」「如し」だけでなく「同然」「と感じる」などの多様な形式が存在することが報告されている。しかし、形式の違いが比喩表現に及ぼす影響は明らかになっていない<sup>(4)</sup>。本稿で扱う「よう」と「まるで」についても出現頻度が高いこと、「AはBのようだ」に見られる推量用法との解釈の揺れが「まるでAはBのようだ」では解消されること以外には明らかになっていない。

- (1) 肌は雪のようだ。
- (2) まるで肌は雪のようだ。

(2)

両者は肌の美しさや白さに対する話者の実感を「雪」を用いて喩えることによって表現する点で共通する。事柄としては同等であるが、表出する形式は異なる。文は事柄を表す命題的な要素と心的態度を表す要素に分かれる。事柄として同等である以上、(1)と(2)の間には心的態度の違いが想定される。物理的には偽の情報をもどのような心的態度によって真として提示するかで両者は分かれる。本稿は「AはBのようだ」構文<sup>(5)</sup>、それに「まるで」が付加された「まるでAはBのようだ」構文がどのように偽の命題を真として提示し比喩を形成するかを論じる。

## 2. 「まるでAはBのようだ」と「AはBのようだ」の使い分け

「まるでAはBのようだ」型比喩表現と「AはBのようだ」型比喩表現の間には使い分けが見られる。本稿はまず両者の使い分けの実態を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下、BCCWJ)を用いてレジスター間の分布から明らかにする。「まるでAはBのようだ」型比喩表現の分布は次の【表1】である。

【表1】:「まるでAはBのようだ」型比喩表現の出現数

レジスター	出現数	全体に占める各レジスターの割合
Yahoo! ブログ	203	48.6%
ベストセラー	160	38.3%
Yahoo! 知恵袋	28	6.7%
教科書	12	2.9%
韻文	10	2.4%
広報誌	3	0.7%
国会会議録	2	0.5%
白書 <sup>(6)</sup>	0	0%
法律	0	0%
合計	418	100%

「Yahoo! ブログ」や文学作品やエッセイを含む「ベストセラー」が第一位と第二位となり両者を合わせて86.9%と大半を占める。話者の感情やイメージを伝達することに主眼が置かれたテキストに出現する。教科書における12例

も10例は国語教科書に収録された文学作品からの用例である。一方で「広報誌」「国会会議録」「白書」「法律」といった事実や話者の主張を聞き手・読み手に正確に伝達する必要があるテキストへの出現は僅少である。特に、統計的な事実を記載する「白書」や解釈の揺れが生じないことが要求される「法律」における使用例は皆無である。それに対して「AはBのようだ」型比喩表現の出現分布は次の【表2】のようになる。

【表2】：「AはBのようだ」型比喩表現の出現数

レジスター	出現数	全体に占める各レジスターの割合
ベストセラー	1645	42.9%
Yahoo! ブログ	1159	30.3%
韻文	411	10.7%
Yahoo! 知恵袋	373	9.7%
教科書	141	3.7%
広報誌	58	1.5%
国会会議録	39	1.0%
白書	5	0.1%
法律	0	0%
合計	<b>3831</b>	<b>100%</b>

「ベストセラー」と「Yahoo! ブログ」が合わせて73.2%となり出現数の大半を占めるのは「まるでAはBのようだ」型比喩表現と同じ出現傾向にある。しかし、「韻文」が「AはBのようだ」型比喩表現では出現数の10%を占めており、2.4%であった「まるでAはBのようだ」型比喩表現よりも多く出現する。また、「広報誌」「国会会議録」「白書」への出現が「まるでAはBのようだ」型比喩表現よりも多く見られる。

この分布から「まるでAはBのようだ」型比喩表現は「AはBのようだ」型比喩表現と基本的に同じ出現傾向を持つことが分かる。一方で、「韻文」及び「広報誌」「国会会議録」「白書」等の事実伝達に重点を置いたテキストへの出現は「AはBのようだ」型比喩表現が優勢になる。「韻文」は短歌・俳句等の定型詩において「まるで～ようだ(な／に)」が6音使用することになり音数を圧迫することを避けるためであると考えられる。以上の出現傾向をまとめる

(4)

と、「まるで A は B のようだ」型比喩表現は話者のイメージを伝達するテキストに出現しやすく、「A は B のようだ」型比喩表現はイメージの伝達だけでなく事実や知識の伝達を行うテキストへの出現が見られる。このような両者の違いは「まるで A は B のようだ」と「A は B のようだ」がどのような心的態度で事柄を捉えているかを反映している。

以下、「まるで」と「よう」の意味を分析し、「まるで A は B のようだ」型比喩表現と「A は B のようだ」型比喩表現がどのような心的態度によって物理的に偽の情報を真の情報として提示するかを見る。

### 3. 「A は B のようだ」と比喩表現

#### 3.1. 「よう」の意味

「よう」は事柄目当てのモダリティ助動詞である。命題について真であると仮定する話者判断を表す。真偽未確認の命題を真と仮定すれば推量用法を形成し、真や偽の命題を真と仮定することで他の用法を形成する。

- (3) 彼は医者だ。
- (4) 彼は医者でない。
- (5) 彼は医者<sup>(7)</sup>のようだ。

(3)から(5)は命題[彼は医者だ]についての文であることは共通するが、その命題をどのように捉えるかが異なる。(3)は命題を真と捉え、(4)は偽と捉える。ともにその真偽は確定している。しかし、(5)は真偽未確認の事態として捉え、「彼」についてその職業を医者であると仮定している。それによって当該人物「彼」についてその職業が「医者」と推量する話者判断が示される。「よう」は真偽未確認の命題を真と仮定することで推量用法を形成する。このような真偽未確認の命題を真と仮定することは推量用法を持つ他の形式にも認められ、それぞれ使い分けられる。

- (6) 家事好き派の中に掃除嫌いが3人に1人、嫌い派にも「洗濯は好き」と答える人が3人に2人いる。洗濯と掃除は、好き嫌いのそれぞれ象徴的存在のようだ。

(サンプル ID : PN1b\_00021)

- (7) 朝のうち、畠山が言っていた。本局が行われたのは三月十七日。この前後、東京も急に春めいてきたのだが、大阪はもっと暖かいらしい。

(サンプル ID : PN5e\_00019)

- (8) むしろ、奥山に実がなる樹木や好物の山芋などがなくなり、里山に下りてきたのが、食害の原因とみる。イノシシだけでなくタヌキ、ウサギ、猿などの被害も深刻だ。豊かなはずの本県の山々に兆す異変である。元凶は奥山を変えた人間なのかもしれない。

(サンプル ID : PN1m\_00001)

(6)(7)(8)は命題[洗濯と掃除は好き嫌いの象徴的存在である][大阪はもっと暖かい][元凶は奥山を変えた人間である]に対して「よう」「らしい」「かもしれない」という事柄目当てのモダリティ形式が付加している。(6)の「洗濯と掃除は好き嫌いの象徴的存在であるようだ」は前文脈で示されている掃除嫌いな人の数と洗濯好きな人の数という根拠に基づいた推論である。与えられた根拠をもとに推論を行うとほぼ必然的に命題[選択と掃除は好き嫌いの象徴的存在である]が導かれる。このような蓋然性を持った判断が「よう」によって示される。(7)は「畠山が言っていた」とあり、大阪が暖かくなったかどうかを話者は確認していない。他者からの伝聞情報であり確証はないが[大阪はもっと暖かい]を真と仮定する。(8)は食害の原因を奥山の自然環境を変えた人間の責任とみるものである。確実な証拠はないが野生動物の行動から推測して[元凶は奥山を変えた人間である]を導く。「らしい」や「かもしれない」は、根拠が間接的であったり状況証拠であったりする薄弱なものでありその判断の蓋然性は「よう」のように高くない。「よう」と他の推量用法を有する形式とは命題を真と仮定するという判断は共通するが、根拠の質や種類、判断の蓋然性の高低によって弁別される。

「よう」は(5)(6)のように真偽未確認の命題を取ることで推量用法を形成するが、真偽未確認の命題だけでなく、真の命題や偽の命題を取ることで(9)(10)(11)のような他の用法を形成する。

- (9) (近づいて来る車を見て)  
社長、車が来たようです。
- (10) 彼は怒ったような顔をしている。
- (11) 肌は雪のようだ。

(9)はいわゆる婉曲用法である。命題[車が来た]が真であっても、「車が来た」と目上の人間に直言することを避けるために「よう」を用いて真と仮定するという態度のもとに発話することにより、婉曲性を獲得する。(10)は様態用法である。他人の顔について、怒っているかどうかの真偽は不確定だが見た目から「怒った」と仮定することで、「顔」の様態を表す。(11)は「肌」につい

(6)

て美しさや白さを表すために「雪」と比喩的に表現する。命題[肌は雪だ]は物理的には成立不可能であり偽であるが、話者の心理内では真と仮定とすることで比喩を形成する。いずれも命題[車が来た][彼が怒った][肌が雪]を真と仮定することによって「よう」が各種の用法を獲得する<sup>(8)</sup>。比喩はこのように「よう」が形成しうる他の文法現象と共通の構造を持つ。

### 3.2. 「AはBのようだ」型比喩表現

(11)のように比喩は物理的には偽である命題が話者の心内においては真として成立することによって形成される。偽である情報が真として捉えられる点で、比喩はその内にみとめ方のカテゴリーを内包する。「よう」は命題を真と仮定することを表し、その判断の蓋然性が高いことを表す。物理的には偽だが主体の心理においては真と仮定することで比喩を形成することができる。それによって表出される比喩表現「AはBのようだ」は判断対象である「A」についてその性質を「B」と仮定する判断によって提示される。

(12) やさしそうに見えても、仮面のような顔の下で何を考えているのかわからないから、と噂する人がふえてきた。

(多和田葉子「ペルソナ」)

(13) 道子は自分の日本語が、坂を駆け降りるように下手になっていくのを感じたが、もうどうにもならなかった。

(多和田葉子「ペルソナ」)

(14) 一年と耐えきれず、わたしは別れた。死んだ魚を抱くようだと不気味がって、夫だった男も、離婚に同意した。

(皆川博子「春の減び」)

(12)は外見だけでは何を考えているのかわからないことについて「仮面」を用いて表現している。(13)はドイツ在住の日本人である「道子」の日本語が急速に下手になっていくさまを「坂を駆け降りる」と表現する。(14)は妻との情事についての実感を「死んだ魚を抱く」と表現する。喩える事物と喩えられる事物は「仮面：顔」「坂を駆け降りる：下手になる」「死んだ魚を抱く：情事」と物理的には成立しない関係を結ぶ。このような偽の情報を当該の文脈における話者が抱く実感として適合したものとして提示することにより表現対象である事物や事柄の具体化が行われる。

「よう」は真と仮定する判断の蓋然性が高いことを表したが、「AはBのようだ」型比喩表現においても、根拠の存在による判断の蓋然性の高さを持つ。「AはBのようだ」による比喩表現は真と仮定するための根拠が存在し、判断

の蓋然性が高いものであるという文脈の中で用いられる。そして、その蓋然性のある判断は聞き手・読み手に共有されることを期待する。

- (15) すると私は、このような他者の関心から長いこと遠ざかっていたような気がした。愚痴をいっているのではない。私も長いこと他者に熱い関心を持つことがなく、そういう人間が相手から関心を得られないことは仕方がなかった。ただケイの関心を、渴いた喉が久し振りにのむ水のように思うことに、やましさがあった。

(山田太一『異人たちとの夏』)

「私」が他者との関わりが薄かったという情報が比喩表現「渴いた喉が久し振りに飲む水のように」の前文脈で展開されている。そのような状況にある話者にとって、他者からの関心は喉の渴きを癒す水と等価であり、「水：関心」という物理的に成立しない関係が、当該の話者にとっては真であり、文脈を追って「私」の心理を理解している読者にも共有可能なものとなる。このように「AはBのようだ」を用いた比喩表現は発話者と聞き手・読み手との間に判断が共有されることを期待して用いられる。

#### 4. 「まるでAはBのようだ」と比喩表現

##### 4.1. 「まるで」の意味

「まるで」は用言が表す物理的な状態や性質の程度性を高める程度副詞として働く場合と状態や性質についての話者判断を表す文を導く文副詞として用いる場合がある。前者は物理的な情報を表し、後者は話者の心理に関わる。比喩は話者の心理的な情報であり、後者と関わる。

程度副詞としての「まるで」は次の(16)(17)(18)(19)(20)のように「怯えてない」「ちがってきた」「みすぼらしい」「対照的」「そっくり」といった用言が表す物理的な性質の程度性を高める。これらは変化や話者の想定、比較対象を内包した状態表現となっている。変化前や話者の想定、比較対象を最小値とすることで「まるで」が取り立てている変化後の状態を最大値として程度性の大きさを表現する。「まるで」はこのように最小値を基準として、その基準を大きく超えた状態を取り立てることで程度の大きさを表す。

- (16) 「その時私がいちばんびっくりしたのは、自分がまるで怯えてなくてことだったわ。どうしてだかはわからないけれど、少しも怖くなかったのよ。

(8)

(サンプル ID : LBa9\_00017)

(17) 大井市場の担当主幹は、このころには瀬田競氏に変わっていた。大井埋立地の野鳥への風向きも、四月当時とはまるでちがってきたことは、すでに十月の会で感づいてはいたが(…)

(サンプル ID : LBa5\_00008)

(18) 案内された私の部屋は四人部屋だった。しかも、がっかりしたことに、ベッドは鉄製のまるでみすぼらしいものだったし、その他の備品は引出しのついた質素な洋服ダンスだけで、机もない。

(サンプル ID : LBa7\_00017)

(19) マチルドとは、まるで対照的に痩せ気味なこの若い娼婦は、ちょっと考える目をして(…)

(サンプル ID : LBa9\_00052)

(20) ジン・カンパニー出版社の初等教育用の「歴史」では、古代史について、次のような、まるで国語の教科書そっくりな記述ではじまっている。

(サンプル ID : LBb3\_00009)

(16)は怯えることが想定される文脈で予想に反して怯えが全く生じていないことを表す。(17)は担当者が変わることによって埋立地の野鳥への対応がすっかり変わったことを表す。(18)は「がっかりしたことに」とあり、話者としては一定の質を持ったベッドが設置してあることを期待していたが、案内された部屋に設置してあるベッドがひどくみすぼらしく、落胆している。その期待に反した状態であるみすぼらしさが最大値となることを表す。(19)は「若い娼婦」の体形が「マチルド」と比較すると対極的に痩せ気味であることを表す。(20)は歴史教科書の冒頭が歴史的記述ではなく、情緒的に書かれていることを「国語の教科書そっくり」と表すことで、当該の記述が国語教科書に類似性が高いことを述べる。このように「まるで」は予想された怯え、前任の担当者、ベッドへの予想、他者、歴史教科書などの基準値を超えた状態を取り立てている。「まるで」は変化前や想定されていた状況や想定、比較対象を最小値として、変化後・実際の状況を最大値とすることで「まるで」が修飾する用言の表す物理的な性質・状態の程度が極大であることを表す。

#### 4.2. 「まるで A は B のようだ」型比喩表現

「まるで」は後述する状態が基準値を大きく超えた状態であることを表す。物理的な状態に作用すれば(16)から(20)のように程度副詞として機能し、話者の心理に作用すれば(21)から(24)のように状況に対する話者の評価を表す文を



<sup>(10)</sup> 導く。導入される文はいずれも対象の性質や状態、様態を具体化する表現である。命題が真偽未確認であれば非比喩的に様態を描写する表現となり、偽であるならば比喩表現となる。

- (21) 少年は元気よく立ちあがると、窓のカーテンをひいた。小屋の中は、よけいまっくらになった。いろりのかすかな火あかりに見えたカーテンは、つぎはぎだらけの黒い布だった。(おかしなことをするな。先にあかりをつけてから、カーテンをひけばいいのに、これじゃあ、まるで灯火管制だ。)と、山村さんは思った。

(サンプル ID : LBan\_00009)

- (22) それにしても、ひどい暑さです。砂は かわききって、ジリジリと音をたて、サボテンも枯れているのです。「こんな 暑いさばくが、ほかにあるだろうか。まるで、かまどの中にいるようだ。」

(サンプル ID : LBan\_00017)

- (23) 牧子が障子を開けたとき、男は急いで何かをポストンバッグの中へ、しまい込んでいた。まるで、見られては困るもののように…。

(サンプル ID : LBb9\_00092)

- (24) 彼は、ヴァイオリン科の学生で、スポーツマン。いつもボールとたわむれていて、本職のヴァイオリンはレッスンの前に申しわけ程度に練習するといった男だったが、世話好きで、私の方が十歳も年上なのに、まるで弟の面倒を見る兄といった調子であった。

(サンプル ID : LBa7\_00017)

(21)は黒いカーテンによって真っ暗になった室内の様子について「灯火管制だ」と表現する。[これは灯火管制だ]は物理的には偽の命題である。しかし、当該文脈における部屋の様子に対する話者の実感としては真である。「まるで」は状態の最大値を取り、(21)においては「灯火管制」と「真っ暗な部屋」との類似が想定される基準値ではなく完全に近いことを卓立する。つまり、物理的に偽の情報が話者の心理において限りなく真に近いことを表す。(22)は主体の感じる砂漠の暑さについて「かまどの中にいるようだ」と表現する。[かまどの中にいる]は物理的な事態としては偽であるが、暑さに対する話者の実感として心理的には真の情報である。「まるで」は砂漠の暑さに対する実感とかまどの中の暑さの類似が話者にとって非常に高く、暑さの表現に最適であることを表す。(21)は「AはBだ」の措定文によって表出される隠喩であり、(22)は比喩指標である「よう」があり直喩である。「まるで」はこのように直喩文、隠喩文<sup>(11)</sup>ともに導く。このような比喩文は命題が表す物理的な情報は偽であり事

(10)

態に反するが、話者の実感としては真であることで有意義な表現となる。つまり、命題が表す物理的な情報よりも話者の心理が優先される。これは通常の言語表現と逆転した性格を持つ。通常、言語表現は命題によって言表される事態を相手に伝達することを目的とする。それに対して、比喩表現は命題が言表する事態は偽であり、情報としては無価値に近い。代わりにイメージ性を言語表現に付加する。このイメージによって、命題では伝達できないより具体的な事柄の有様や話者の心理を伝達する。

このような典型的な比喩文の他に(23)のような非比喩文、(24)のような「よう」に限らないモダリティ形式を有した文を導く。(23)は「男」がボストンバッグへと物を仕舞った様子を「見られては困るもののように」と表現する。見られては困るかどうかは当該の文脈の時点では不確定である。しかし、話者にとってはその仕舞う様に類似する印象は見られては困るものを仕舞うという状況となる。未確認ではあるが、最も類似する印象の選択を行っている。(24)は世話好きな「彼」と話者の関係について「弟の面倒を見る兄」と表現する。話者と「彼」との関係に類似した事態が「弟の面倒を見る兄」<sup>(12)</sup>である。「まるで」はこのように対象の性質についての話者判断を表す文を導き、後述する状態が基準値を超え、話者の心理にとってほぼ真であることを表す。

このように「まるでAはBのようだ」型比喩表現は表現対象と話者が最も類似しているとして選択された事物によって形成される。これは換言すれば「まるでAはBのようだ」型比喩表現は話者にとっての最適判断であることを表す。「まるでAはBのようだ」を用いた比喩は次の(25)(26)のように話者にとっての最適な判断であることを表す。

(25) くるりと、まるでモデルのように美しくターンして、先輩は俺を置いて歩き出す。

(新海誠『小説 君の名は。』)

(26) 鏡花の描く物語は、まるで花で作ったお酒のようよ! 可憐な野菊、神秘的の月見草、あでやかな山梔子、凜然たる忍冬、咲き誇る金木犀。

(野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』)

(25)はアルバイト先の先輩とのデートの帰り道の場面である。憧れの先輩の動作に対して「モデルのように美しくターンして」と表現する。この文脈で言及される「先輩」は職業的にはモデルではない。発話主体である登場人物にとってその美しさを表現するために最適な素材が「モデル」である。(26)は泉鏡花作品について語る文学好きのヒロインの言葉である。発話主体であるヒロインにとって泉鏡花の作品の持つ魅力や美しさを表すために最適な事物が「花で

作ったお酒」である。特に(26)は文学作品を食すことができるという特殊能力を有した人物の特異な実感の表明である。この判断は話者独自の根拠に基づくもので、当該の人物にとっては最適な判断であるが、それが聞き手にとっても最適であるかは分からない。このように「まるでAはBのようだ」型比喩表現は話者にとって対象の事物・事柄を表現するために最適な選択を行うが、聞き手・読み手との共有が期待できるかは不明として提示される。このように「AはBのようだ」型比喩表現と「まるでAはBのようだ」型の比喩表現は命題をどのように捉えるか、話者と聞き手との間で共有が期待できるかに違いが存在する。

#### 4.3. イメージ伝達の方略

話者にとっての最適な判断を表す「まるでAはBのようだ」型比喩表現は、話者が抱くイメージを伝達するために「AはBのようだ」型比喩表現とは異なる、喩辞の詳細な指定といった方略がとられる。「まるでAはBのようだ」型比喩表現は「AはBのようだ」型比喩表現に比べて喩辞の文節数が長い傾向にあり、複雑な喩辞を用いる。文節数の違いは【表3】となる。

【表3】：喩辞の文節数

「まるでAはBのようだ」型比喩			「AはBのようだ」型比喩		
文節数	用例数	全体に占める割合(%)	文節数	用例数	全体に占める割合(%)
1	875	30	1	592	65.6
2	862	29.6	2	205	22.7
3	562	19.3	3	70	7.8
4	284	9.8	4	21	2.3
5	159	5.5	5	5	0.6
6	69	2.4	6	3	0.3
7	39	1.3	7	2	0.3
8	22	0.8	8	0	0
9	13	0.4	9	2	0.2
10文節以上	27	0.9	10文節以上	2	0.2
合計	2912	100	合計	1000	100

「まるでAはBのようだ」型比喩表現と「AはBのようだ」型比喩表現で1文節が最多である点は共通する。しかし、1文節の喩辞が全体に占める割合は「まるでAはBのようだ」型比喩では30%で、「AはBのようだ」型比喩表現では65.6%となっている。「AはBのようだ」型比喩表現よりも「まるでAはBのようだ」型比喩表現の方が2文節以上の喩辞が占める割合が高いことを意味する。実際に「まるでAはBのようだ」型比喩表現の2文節喩辞は1文節に匹敵する29.6%だが、「AはBのようだ」型比喩表現は1文節の3分の1ほどの22.7%となる。さらに、「AはBのようだ」型比喩表現は1文節と2文節の割合の合計が88.3%となり、この二つの文節数が9割近くを占める。それに対して「まるでAはBのようだ」型比喩表現は59.6%となり、約6割を占めるにとどまる。つまり、「まるでAはBのようだ」型比喩表現は3文節以上の詳細に特徴づけられた喩辞を使用しやすいことが分かる。これは「まるで」が文を導く副詞であることによる。

- (27) ぼくは思わずほんと重い吐息をついて、その風景にすっかり魅せられてしまっているのに気づきました。悩ましい戦慄が背筋をつらぬき、ぼくはスペインに行ったことがないのだからこの景色を見たはずはないと考えるのに、どうしても見たことのある光景だと思われてならないのでした。その画面はまるで記憶の底に開かれた窓のようでした。  
(安部公房「S・カルマ氏の犯罪」)

名前を失い、困惑した主人公の「ぼく」が病院の待合室で偶然手に取った雑誌に掲載されていたスペインの荒野の画面について「記憶の底に開かれた窓」と表現する。実際に行ったことはないが、それでも懐かしさを覚える風景に対する感情を表現する。当該の文脈における発話者が感じている感情を最も適切に表現する事柄は「記憶の底に開かれた窓」である。読者の中に名前を失うという特殊な経験を持つものは想定されず、読者と読み手には隔りがある。喩辞の具体化は事物の喚起するイメージを詳細に造形する。「まるで」は発話主体にとっての最適な判断を導くが、話者にとっての最適な判断が聞き手にとっての最適な判断であるとは限らず、両者の差を埋める必要がある。そのため詳細に形作られたイメージを提示する。両者の間に共有される情報が少ないため、その差を埋めるための情報を喩辞によって補填する。

## 5. おわりに

### 5.1. ま と め

「よう」は命題を真と仮定する判断の蓋然性が高いことを表す。「よう」は物理的には偽の情報を話者の心理内では真と仮定することで比喩を形成する。それによって形成された「AはBのようだ」型比喩表現は「物理的には偽であるが話者の心理では真」と仮定されるものであり、一定の根拠のある蓋然性の高い判断である。それは聞き手・読み手と共有されることを期待して提示される。「AはBのようだ」型比喩表現は話者のみに最適なのではなく、聞き手にも共有される情報として提示されるため、【表2】に見られるように国会会議録や白書などのような事実を伝達することが要求されるテキストにおいて出現することが可能である。「まるで」は状態が最大値を取ることを表し、比喩においては喩辞と被喩辞の類似性を卓立することで比喩的状態の完全性を表す。「まるでAはBのようだ」型比喩表現は話者にとっての最適な判断として提示する。判断の蓋然性はあるが、それは話者が独自に見出した根拠によるもので共有性は期待されない。【表1】に見たように国会会議録や白書などに出現が確認できないのは、それらのテキストは話者にとっての最適な判断ではなく聞き手や不特定多数の人々に共有されることが要求されるためである。「まるでAはBのようだ」型比喩表現と「AはBのようだ」型比喩表現は物理的には偽の情報を話者の心理内では真であるとして比喩を形成することは共通するが、判断が話者にとって最適な判断であるのか、判断の蓋然性が高く共有されることが期待される判断であるのかの違いがある。

### 5.2. 今後の課題

比喩を表出する形式の異なりは小松原・田丸(2019)において「写像方略」の違いとして論じられる。写像方略とは、「指標が言語的に表している関係と、比喩伝達における概念的な写像関係との関係」(39)と規定される。「雪のような肌」のように「雪：肌」が直接的な写像関係にあり比喩指標「よう」のプロファイルと一致する場合を「直接写像方略」と呼ぶ。対して「肌は雪のように白い」は構文上の修飾・被修飾の対応は「雪：白い」だが比喩の写像関係は「雪：肌」であり、概念の対応(雪：肌)と構文上の対応(雪：白い)にズレが生じている。このような場合を「間接写像方略」と呼ぶ。間接写像方略はさらに「主観性明示方略」「挿入方略」「隠喩支援方略」「例示方略」と下位分類される。直喩の表現形式を喩辞と被喩辞の意味的対応関係から分類を行った研究と評価される。また、比喩を表出する形式は中村(1977)において比喩指標の大規模な収集が行われ、400種を超える語句、それらを組み合わせた1600を超える構

(14)

文が比喩指標として品詞や意味の特徴から分類されている。本稿はそのような分類によるアプローチは取らず、副詞「まるで」や助動詞「よう」が比喩を表す命題をどのように捉えているかという文法論的アプローチをとった。このような二つのアプローチは相補的に行われる必要がある。しかし、用例の収集調査<sup>(13)</sup>に比べて比喩表現の文法的な構造を分析する研究は僅少である。現時点で収集・分類された比喩表現がどのような文法的制約を受け、どのように運用されるかを解明していくことが求められる。

#### 【注】

- (1) 比喩論では「事実否定性」と呼ばれる。しかし、後述するように話者の心理にとっては真の情報である。物理的な性質としては否定されるが、心理的には事実であるため「事実否定性」は術語として採用しない。
- (2) 益岡(2000)は「よう」が表す推量が「らしい」によって表される推量よりも主体の確信度が高いことを論じている。
- (3) 本稿は偽の情報を提示する構文を取り扱うが、真の情報を導く副詞については藤原(2011)が論じている。また、知覚動詞「感じる」が偽の命題を取ることで比喩用法を獲得することを菊地(2018)が論じている。
- (4) 中村(1977)では文学作品 50 篇を対象とした直喩の収集調査を行っており、比喩指標ごとの出現頻度を提示している。そこでは、助動詞「よう」は 50 作品 5448 例出現し、副詞「まるで」は 32 作品 383 例出現している。両者が出現頻度の第一位と第二位である。
- (5) 連体修飾形式「A のような B」(雪のような肌)「A のような X・B」(雪のような白い肌)、連用修飾形式「A のように B」(雪のように白い)「A のように X・B」(雪のように白い肌)も含める。「まるで」についても同様。
- (6) 「まるで A は B のようだ」型比喩表現は語彙素「丸で」をキーとして検索を行い、収集された用例から「まるで」が「よう」と共起する構文を選定し、その中で比喩として用いられている用例を選定した。「A は B のようだ」型比喩表現は語彙素「様」で検索し、比喩として用いられている例を選定した。テキストの性質が一定するサブコーパスの「特定目的」を用いた。
- (7) 以下、出典の明記していない用例は作例である。出典として「サンプル ID」を付しているものは BCCWJ から収集された例である。「作家名」「作品名」は稿者の収集した例である。用例の比喩表現部分には下線を付す。
- (8) 森山(1995)や前田(2006)は「よう」の意味を「類似性」によって説明するが、(9)のような用例を説明することが困難となる。
- (9) 「まるで」は性質を修飾するため次のような二値的な判断を修飾することはできない。

\* (彼の職業について言及して)まるで彼は医者だ。

対象となる人物の職業についての文であり、「医者であるか否か」が問題となる二値的な判断である。「まるで」は真か偽を決定する二値的な判断を表す文に

は付加できず、対象の性質に係る。このような二値的な判断に付加しないという「まるで」の性質は「彼は力士のようだ」のような「AはBだ」構文に見られる比喩か推量かの解釈の曖昧性を解消する。小松原(2017)はこのような比喩解釈を強いる構文を「強い直喩」と呼び、構文が「その表現が比喩である」ことを明示するものであるとする。このような比喩の明示性は「まるで」が比喩性などのパラメーターを持つのではなく、性質への判断に係るという文法的な性質が比喩文としての解釈しか許容しないために生じることである。

- (10) 文を導く機能により、終止形「ようだ」による叙述型の比喩表現が「AはBのようだ」型比喩表現と比較すると増加する。直喩は菊地(2019)の調査では「AはBのようだ」型比喩表現は連用形が使用率の最多であり、次点が連体形となる。終止形は全体の2%となる。「まるでAはBのようだ」型比喩表現について共起する「よう」の活用形をBCCWJから収集した用例のうち1000例を対象に調査すると、【表】のような結果が得られる。

【表】:「まるでAはBのようだ」型比喩表現の活用形

構文的機能	活用形	用例数	全体に占める率(%)
修飾	連用形「ように」	593	59.3
	連体形「ような」	255	25.5
述語	終止形「ようだ」	134	13.4
その他	連用中止「ようで」	10	1
	語幹「よう」	8	0.8
合計		1000	100

連用・連体という修飾節としての使用が大半であることは「AはBのようだ」型比喩表現と同様である。一方で、終止形の使用率が「AはBのようだ」型比喩表現では2%であったのに対して「まるでAはBのようだ」型比喩表現では13.4%と6倍以上の増加を見せる。「まるで」が付加されることにより、終止形として述語節を形成しやすくなっていることが分かる。

- (11) 半沢(2016)や多門(2018)のように「AはBだ」によって表出される比喩表現を被喩辞の明示によって直喩とする立場もある。その場合、「まるで」は直喩文を導くことになる。
- (12) 中川(2013)は「まるで」が談話標識として機能することを指摘している。これは「まるで」の持つ文副詞としての機能による。

たぶんあの人<sub>1</sub>が自分のほうからあ<sub>2</sub>んたのこ<sub>2</sub>へやって来て、あ<sub>2</sub>んたの胸に顔を埋めながら、涙を流して自白をす<sub>1</sub>ると思<sub>1</sub>ってるんでしょ<sub>1</sub>う！ ええ、あ<sub>2</sub>んたはなんておめ<sub>1</sub>でたいんでしょ<sub>1</sub>う！ なんて！ 皆があ<sub>2</sub>んたをだ<sub>1</sub>ましてい<sub>1</sub>る、まるで……まるで……それに、あ<sub>2</sub>んたはあ<sub>2</sub>の男<sub>2</sub>なんぞを信用<sub>1</sub>して、よくまあ恥<sub>1</sub>ずかしく<sub>1</sub>ないことだ。あ<sub>2</sub>の男<sub>2</sub>がいつもあ<sub>2</sub>んたに一

杯くわしてるのが、いったい目に入らないの？

(ドストエフスキー 米川正夫訳『白痴』)

善良な性質を持ち、騙されていることに気づいていない主人公マイシュキン公爵に対する登場人物の批評的な発話である。周りの人間が公爵を騙している様子を喩えようとして「まるで……まるで……」と言いきしている。適当な喩辞が見つからないためか「それに」以下は公爵が自信を騙している男を信用しているのが恥ずかしいと話題を変更している。喩による対象の性質規定は行われていないが、それを行おうとしていることが「まるで」の言いきしから読み取ることができる。文頭に使用することによって、これから発話主体が行った対象の判断についての話題を展開することを表示する。

- (13) 中村(1977)、小松原・田丸(2019)のほかに Kikuchi. et. al. 2019. が中村(1977)にて収集された喩指標をキーとして BCCWJ から直喩用例を収集し、喩辞や被喩辞、喩指標の組み合わせなどの各種情報をアノテーションしている。

#### 【参考文献】

- 菊地礼(2018)「喩指標としての「感じる」—文法形式と喩の関係—」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』(3)：288-297.
- 菊地礼(2019)「連体修飾構造の直喩における属性の表現」『中央大学国文』68：138-125.
- Kikuchi Rei, Kato Sachi, Asahara Masayuki, 2019, "Collecting figurative expressions using indicators and a semantic tagged Japanese corpus", ICLC 15th.
- 小松原哲太(2017)「喩を導入する構文としての直喩の語用論的機能」加藤重広・滝浦真人(編)『日本語語用論フォーラム2』：47-73 ひつじ書房.
- 小松原哲太・田丸歩実(2019)「日本語における直喩の写像方略の類型」『日本認知言語学会大会論文集』19：37-49.
- 多門靖容(2018)「書評 半沢幹一著『言語表現喩像論』」『日本語の研究』14(2)：118-125.
- 中川祐治(2013)「比況の副詞の位置」『国語の研究』38：10-8.
- 中村明(1977)『喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告54.
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』ひつじ書房.
- 半沢幹一(2016)『言語表現喩像論』おうふう.
- 藤原浩史(2011)「真の情報を導く副詞の形成」『文法記述の諸相』(中央大学人文科学研究所研究叢書)：41-64 中央大学出版部.
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 水谷静夫(1995)「マルデ攷」『計量国語学』20(3)：99-111.
- 前田直子(2006)『「ように」の意味・用法』笠間書院.
- 森山卓郎(1995)「推量・喩比況・例示—「よう／みたい」の多義性をめぐって—」『日本語の研究 宮地裕・敦子先生古稀記念論集』：493-526 明治書院.
- 山梨正明(1988)『喩と理解』東京大学出版会.



【引用例出典】

コーパス

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> 検索：中納言)

書籍

安部公房『壁』新潮文庫

新海誠『小説 君の名は。』角川文庫

高原英里編『リテラリー・ゴシック・イン・ジャパン』ちくま文庫

多和田葉子『犬婚入り』講談社文庫

ドストエフスキー・米川正夫訳『白痴』岩波文庫

野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』ファミ通文庫

山田太一『異人たちとの夏』新潮文庫

(きくち れい 本大学院博士課程後期)

